

国指定重要文化財 宝城坊本堂下の調査

所在地 伊勢原市日向 1466 ほか
調査機関 伊勢原市教育委員会
調査担当 井出智之
調査原因 確認調査
調査期間 平成 24 年 10 月 11 日～10 月 31 日
平成 25 年 3 月 12 日～3 月 29 日
調査面積 合計 23.56 m²

延享 2 年 (1745) 本堂と仏像の修理が行われたことが『新編相模国風土記稿』に記されています。

時の為政者から寄進や参詣が絶えない寺院で、最盛期には多数の坊があり、その別当坊が宝城坊です。

現状の地形は、本堂北側に山を背負い、西側は約 30m、東側は約 40m、南側は約 50m の範囲は平場となっていますが、その先は谷へと続いています。

1. 遺跡の立地

宝城坊は、神奈川県のおぼ中央部にあたる霊峰大山の北東部、日向山の中腹に位置する寺院で、一般的には「日向薬師」という通称で知られています。寺院としての歴史は古く、「日向山 霊山寺」として古文書にみられ、縁起では霊亀 2 年 (716) 行基の創建とされています。平安時代の天暦 6 年 (952) 村上天皇の勅願により銅鐘が铸造され、仁平 3 年 (1153) 鳥羽上皇の院宣により改铸されたことが銅鐘の銘文からわかります。寛仁 4 年 (1020) ～万寿元年 (1024) の間には相模国司大江公資の妻で歌人の相模が参籠しています。

現在本尊として祀られている「木造薬師如来両脇侍像」は 10 世紀後半に東国で発生する「鉦彫り」技法の緒元といわれています。これらから、平安時代には寺院として成立していたことがわかります。

鎌倉時代の建久 5 年 (1194) 頼朝が娘の病氣平癒祈願のため参詣、建暦元年 (1211) 政子が実朝夫人と参詣していることが『吾妻鏡』に記されています。

室町時代の暦應 3 年 (1340) 銅鐘が (現存国指定) 改铸され、康暦 2 年 (1380) 後円融天皇の綸旨により三河、遠江の棟別銭で堂を修造しています。

江戸時代の万治 3 年 (1660) 幕府から丹沢の立木 100 本を賜り本堂を修理、元文 5 年 (1740) ～



第 1 図 遺跡の位置図 (1/25,000)

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、国指定重要文化財宝城坊本堂の保存修理事業に伴い、現本堂の地盤構造と従前建物の有無を確認することを目的に実施しました。

3. 調査の概要

調査は堂建物の解体が完了し、礎石のみとなった状態で実施しました。本堂の部材を移動しながら床下部分にトレンチと呼ばれる方形の区画を設定し、人力で掘削する方法で、平成 24 年 10 月と平成 25 年 3 月の 2 回に分けて実施しました。現状では、本堂の北側及び東西に高まりがみられることから、南に延びる尾根を削平して平場を構築していると想定し、平成 24 年 10 月の調査では、礎石の内側の北西

部と北東部（内陣部分）に、南側は石垣、階段が存在し、盛土が想定される、南西部と階段西側（建物外部）にトレンチを設定しました。

北西トレンチ

現地表から 14 cm まではロームを突き固めた土、その下で硬化面が確認でき、それに沿って広げたところ、トレンチの西寄りでは硬化面が途切れる部分がありました。トレンチを拡張したところ、断面が緩やかな U 字形の溝状遺構であることがわかりました。

溝状遺構の検出位置が現本堂の西端礎石より内側であることから、従前建物に伴う排水溝または、雨落ち溝と想定し、北側部分にトレンチを設定し掘削したところ、浅くなりながらも継続していることが確認できました。また、建物外周の溝を想定し、北端の中央部にトレンチを設定しましたが、溝状遺構は確認されませんでした。

なお、溝状遺構の覆土中から平安時代後半のロクロ土師器の底部と縄叩き痕のある瓦の小片が出土しています。

トレンチ全体としては、硬化面を掘り込む形で計 4 基のピットが確認できましたが、形状や深さ、方向性に規格的な配置は見出せませんでした。

北東トレンチ

北西トレンチの状況から、このトレンチにおいても東側で溝状遺構の有無を確認しましたが、見つかりませんでした。北西トレンチと同様、現地表から 14 cm 下に硬化面があり、計 11 基のピットが確認されました。規則的な配置は見いだせませんでした。炭化物を大量に詰め込んだピットや鉄滓、銅製金具、焼土などが出土するピットなど、建物構造とは異なる様相のピットが確認されました。

南西トレンチ

現地表から 32 cm で硬化面がみられ、南側 2/3 は石垣設置のための掘削を受けていました。石垣の裏込については大小の石を入れ込んだだけの状態であり、

突き固めるなどの整備をしていない様子でした。

階段西側トレンチ

このトレンチについては南西トレンチと同様で、出土した遺物は裏込の覆土上層からの陶器の小破片のみでした。

平成 25 年 3 月の調査では、礎石内側の南西部（外陣部分）と石垣の南東部分（建物外部）の状況を確認するために設定しました。

礎石内側南西トレンチ（外陣部分）

現地表から 30 cm 程下で硬化面が確認され、3 基のピットが見つかりました。ピットの中からは縄叩き痕のある瓦の小片が出土しています。溝状遺構から出土した瓦と同じ種類の瓦です。

石垣南東トレンチ（建物外部）

現地表から 20 cm 程下に硬化面があり、その下で南側への傾斜が確認されました。覆土下層から中世の瓦片 7 点が出土しています。トレンチの 1/2 は石垣設置のための掘削を受けていますが、瓦の出土した覆土には達していません。なお、石垣の裏込は南西トレンチ同様整備されていませんでした。

4. まとめ

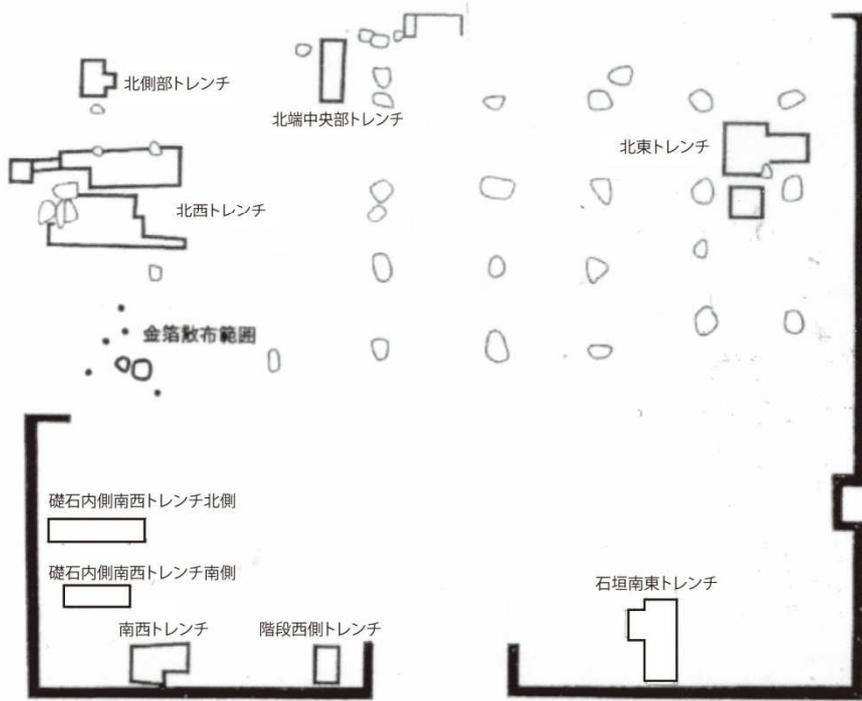
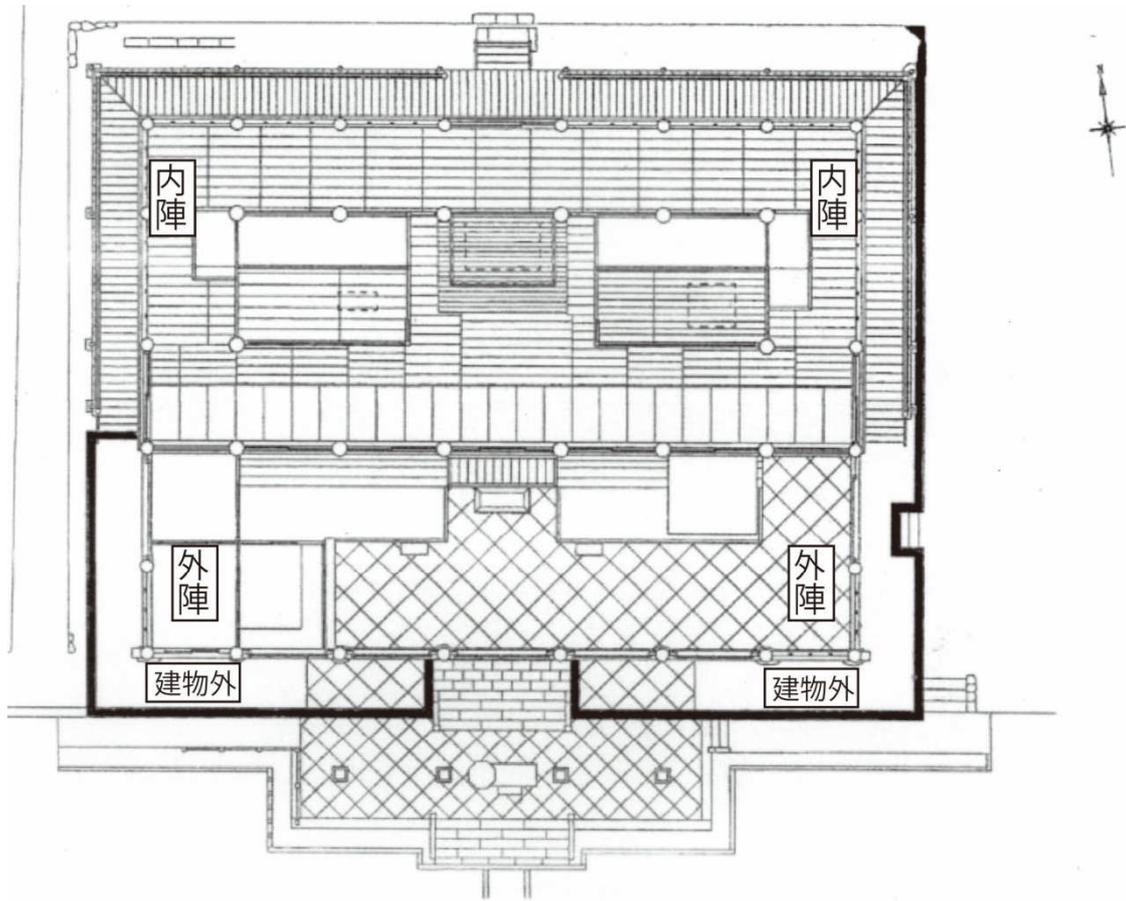
今回の調査では次の点が確認できました。

1. 現本堂の所在する平場が、南に延びる尾根を削平して造り出されている。（大規模造成）
2. ピットや溝状遺構の上にロームを固めた層が確認できることから、従前建物が存在した可能性がある。
3. 部分的であれ瓦葺の可能性がある。

今後、遺構や出土遺物を詳細に検討することにより、平場の造成時期解明の手懸りにしていきたいと考えています。

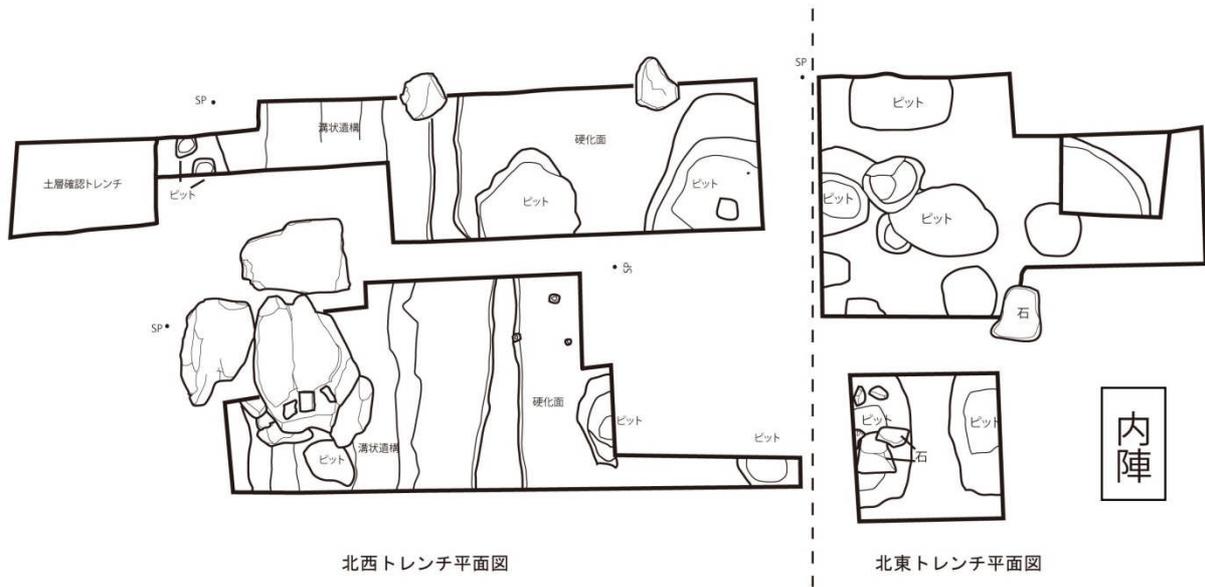
参考文献

- ・『新編相模国風土記稿』昭和 60 年発行 雄山閣
- ・『国史大系 吾妻鏡』昭和 55 年発行 吉川弘文館



トレンチ設定図

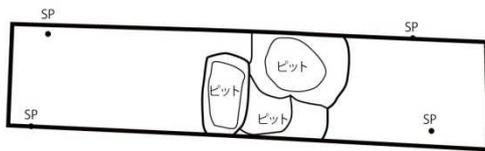




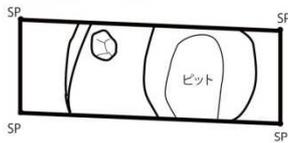
北西トレンチ平面図

北東トレンチ平面図

礎石内側南西トレンチ北側

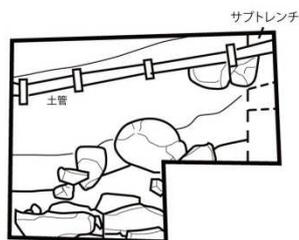


礎石内側南西トレンチ南側



礎石内側南西トレンチ平面図

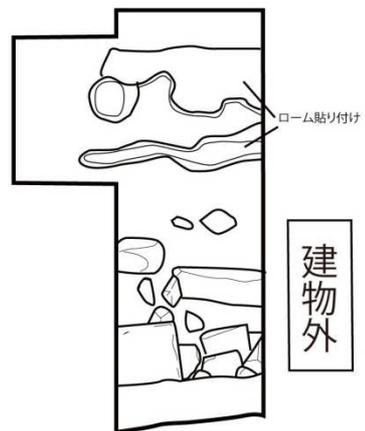
外陣



南西部（建物外）平面図



階段西側（建物外）平面図



石垣南東部（建物外）平面図

建物外



写真1 現場状況



写真4 北東トレンチ設定



写真2 北西トレンチ設定



写真5 北東トレンチ状況



写真3 北西トレンチ状況



写真6 南西トレンチ状況



写真7 階段西側トレンチ状況



写真10 礎石内側南西南側トレンチ状況



写真8 南東トレンチ状況



写真11 溝状遺構瓦出土状況



写真9 礎石内側南西北側トレンチ状況



写真12 石垣南東トレンチ瓦出土状況